



# 父母会便り

発行 聖イグナチオ教会 教会学校父母会

## ～ ハビエル・ガラルダ神父様を囲んで ～



先月92歳の誕生日を迎えられたガラルダ神父様。スペイン貴族階級の家にお生まれになり5人兄弟の末っ子としてお育ちになりました。幼少の頃はスペイン内乱で食べ物がなく、貧しい生活も経験されたそうですが、愛に満ちたご家族のお話や、ご自身が受けたカトリック教育についてお伺いしました。

### Q. ご家庭や学校でどのような宗教教育を受けましたか。

A. 家では毎晩夕食後にロザリオの祈りをする。母がロザリオを出すと子供たちは一目散に逃げあちこちに隠れた。父は日曜日に、母は一日に3回ミサに行くこともあった。母はご聖体を頂いてから膝をついて祈っていた。私もひざまずき手を額にあて祈っていた。母は信心深い子だと感心していたが、実は指の間から女の子を見ていた…。就寝時も祈る。聖週間、特に聖木曜日には7つの教会を巡って、特別に飾られたご聖体訪問をした。家族そろってミサに行く。信仰深いカトリックの雰囲気ある家庭だった。兄も一人司祭になった。自分は末っ子で可愛がられ、兄が強く怖いので反抗期はなかった。学校はマリア会。小さいころから公教要理（カトリックの教義書）を暗記していた。

11歳頃から放課後、また土曜日も、若者たちが集い信仰を分かち合うイエズス会の施設 CLC (Christian Life Center) に通い、聖歌を歌い、卓球やサッカーをして毎日楽しく過ごしていた。勉強は嫌いだった。13歳頃からは毎朝ミサに行き、ミサの前の15分は黙想した。黙想会に出ていた14歳のときにイエズス会に入会することが私の道だと決意した。



写真 左から ハビエル少年、お母様、お父様、ご家族と



## Q. 子どものころ楽しみにしていたイベントは何ですか？

A. クリスマス。部屋をひとつ使って馬小屋を飾っていた。「イエス様はこんなところでお生まれになった」などと話しながら飾ったことは、家族との良き思い出。当時クリスマスキャロルはあまり歌わず、クリスマスツリーもない。馬小屋だけ。日本の家庭でも小さくても馬小屋を飾ってはどうか。思い出になるし、思い出す。クリスマスの本と一緒に読むのもいい。クリスマスイブの夕食後は12時にミサへ行き、帰宅して大騒ぎ。家族や親戚が集まる楽しいイベントだった。



また、誕生日よりも霊名祝日を盛大に祝った。自分の霊名祝日は12月3日聖ザビエルの祝日。ローストチキンが一羽食卓に出るが、結局兄に取られ美味しいところを食べられてしまった。5月下旬から6月中旬に行われる聖体行列も一大イベントで思い出のひとつ。キリストの聖体祝日に2000人位が参加し、CLCで自分も旗（タペストリー）を持って歩いた。

## Q. イエズス会に入るとき、日本に来ると決まったときのお母さまは？

A. イエズス会に入る日、それまで見たこともなかった母の涙を見た。悲しいわけではない。近くでいつでも会える、司祭はいつまでも親の子。結婚で誰かの夫になってしまうより寂しくはない。11月の入会時、長兄は「ハビエルのことだからクリスマスには戻ってくるだろう」と言った。1954年、聖フランシスコ・ザビエルの腕を持って、アルペ神父様（当教会アルペホールに肖像写真があります）が「日本にはまだ神父が少ない」とリクルートしに来た。日本へ行くことを志願した。私の学年から3人が選ばれた。母はルルドのマリア様に、行かないでと祈った。名前をハビエル（ザビエル）にしなればよかった、日本に行ったら戻ってこないと思っていたから。ところがある日、母が修練院のみこころの像に祈り、ふと何かを感じた。行ってもいいのだと。私はスータン（写真右）を着て家に挨拶に行った。当時、日本への渡航に反対していた親戚にも認めてもらえた。ところが父の心臓が悪くなり1年延期となった。先に出発した2人は英語を勉強するためライナー（観光客船）でボストンへ向かった。私は管区長よりボストンへの飛行機利用を許可された。実は母が許可をもらっていたのだ。母は明治時代、新婚旅行でフィリピン、インド、日本、中国、ロシアまでライナーで回った経験があり、息子が苦勞せず飛行機で行けるように「一人であのライナーに1ヵ月も乗るなんて、あの子の性格だと誰かと結婚してしまう」という管区長への母の入れ知恵のおかげであった。そのとき私は25, 6歳だった。アメリカで6ヵ月英語を勉強し、1958年、神父6人でライナーに乗って来日した。父は私が日本に来て2年で亡くなったので、来日後は一度も会えなかった。母とは来日後12年経ってスペインに戻り再会。それから102歳で亡くなるまで何度も会えた。





## Q. 日本の家庭に必要なもの、足りないものは？

### A. 日本の家庭の中までは知らないけれど…

- ① 一緒に祈ること。無理やりでも一緒に祈る。ロザリオをみんなで祈る。家族みんなで祈る。
- ② 子どもたちとミサに行くこと。
- ③ イエスは主なる友だち。ペトロのようにイエスに対して尊敬に満ちた友情を育てるのが大事。イエス・キリストとマリアと友達になること。キリストのようにキリストと共に生きる。
- ④ 子どもが一時的に離れることはあっても、いつか戻れるように信じて、それを教える。
- ⑤ 人を大切にすること。貧しい人に親が何かしていればそれをはっきり覚えている。子どもは親がした行いは覚えている。親の見本を実行して見せること。立派なことを言って実行しないのではなく、立派な行いをしましょう。
- ⑥ CLCで貧しい人たちの所を訪問していた。困っている人たちの所に行って経験させるのがいい。
- ⑦ 片方の親がカトリックに理解がない場合でも、カトリックに対して軽蔑でなく尊敬を見せる。
- ⑧ 愛する事を信じる。



### ～ ガラルダ神父様のお話を伺って ～

死刑囚の慰問を続けていらっしゃるガラルダ神父様。この日もインタビューを終えた後、小菅刑務所へ向かわれました。「慰問して思うのは、子供たちが悩みある人を助けるようになって欲しい、そのようにさせて欲しい」とおっしゃったことが印象に残っています。

この他にも、好きなお母様の手料理などについても伺いました。好きな料理はパエリアやスペインのハム、チキン、カニなどが入ったクリームコロッケだそうです。ただし、貴族の家柄でしたから、お母様が台所に入ることも、外で子どもをかわいがることもできなかったそうです。私たちとは全く違う次元でご苦労も多かったのだらうと思いました。しかし、親が子どもに伝えるべきことに変わりはないと感じました。またお母様の愛情の深さに、これから育ちゆく我が子を送り出す際のヒントをもらえたような気がします。ガラルダ神父様ありがとうございました。



©2023 Anna Recetas Fáciles